朝夷巡嶋記

第一編　巻三

イ 13
939
~~23~~ 3

1 13
939
28

朝東巡嶋記全傳巻之三

東都　曲亭主人編輯

大正十五年二月
花房仙次郎氏寄贈

初輯第五

絲の素れの情太薄
催光も秋の蠶屠

痛しいろる範頼朝臣八一生涯の大尼難らの目小遠りて金沢の魚屠所の羊となるよ式些も愛ひ之けるど時政が好意も鎌倉殿乃御疑念稍恩免のもん使とゆるさけりと雖ども老臣ホが諫を聽ず生平よりも

いと華やかに後者まへは装しく営中へ赴死のへが時政が婿なりける稲毛三郎重成兵士騎後へく若宮巷路より出迎へ矢庭より蒲殿主従を失ことと推とり公竜鎌倉殿の御従ひ伊豆の修善寺へ入ると聞て重成仰天兼ねて

とのみに移と久し誘ふへといそぐせハ範頼と重成伯父あへどこと重成ぞりも逆

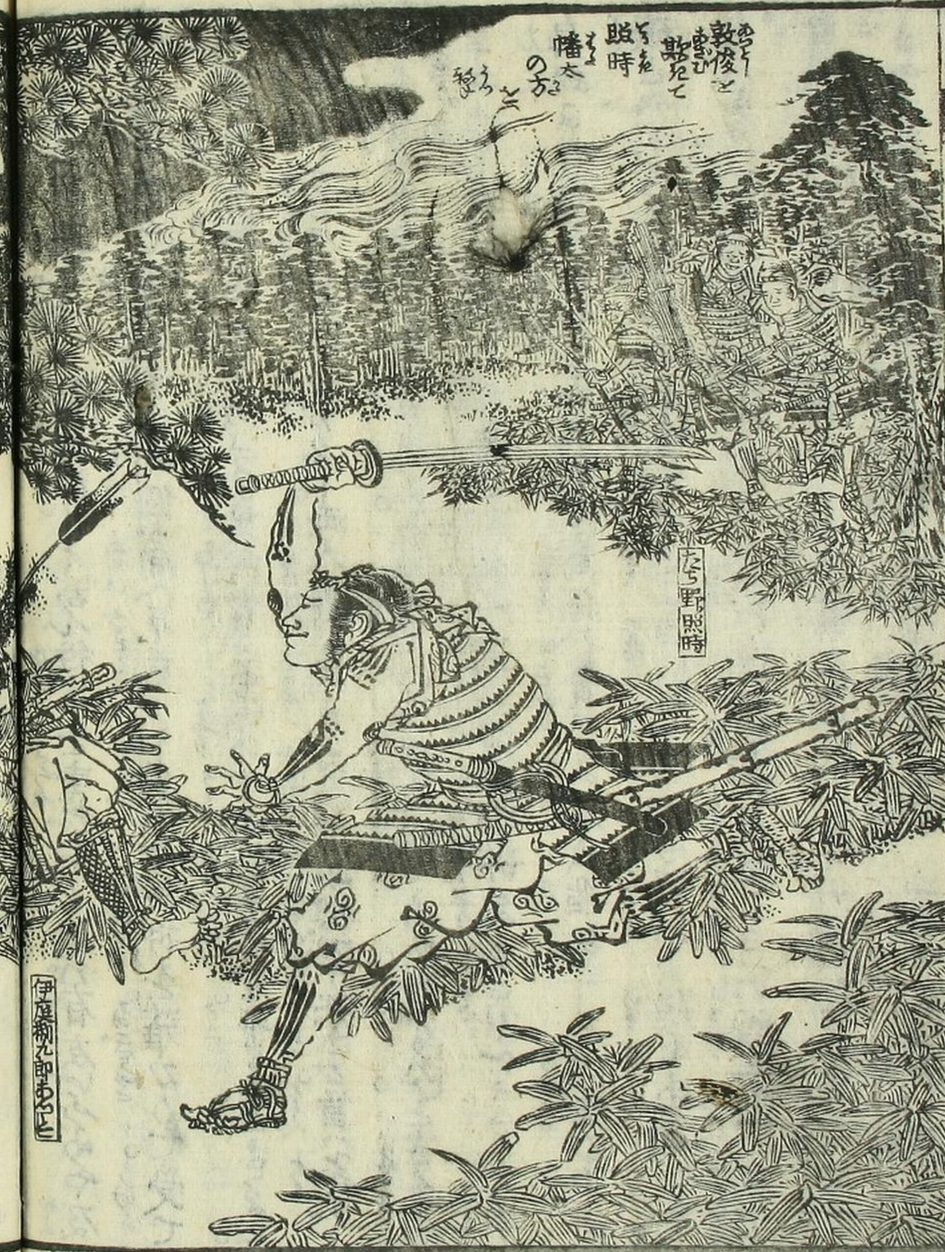
心ゐ〜何なめげやうし掠めて再度のちん咎を蒙りけん。とゐもかくゐも推まち
きてくもん疑ひをまろ〜解べ〜。枉て途式もふ死ひへ用紀ひへひへ。といと忙さる
声ざゐゐゆてくり返〜て勸解ゐへが稲毛三郎冷笑ひ重成かくくひへべて
よりゐ先へ一歩も放〜ゐゐゆてべうもあくどさても盃の淳言ゐてといと
いゐめ〜く窘る式蒲殿ハゐ用辞を盡〜て和解んとゐへ招み遥後方ゐなり
左衛大夫属重能ハ遽〜く進ミよるてく。主の袂を引動〜ゐあるべ〜とゐ廣
通ホゐ豫てよりおゐせ〜ゐゐ。この期ゐ及びて百千遍陳ゐゐハ由なる死而
ゐ欠ゐ所詮嚴命ゐ隨ゐてく。さてより更ホ祿吾寺へ赴せゐゐゐゐ何式ゐく
逆謀ゐる死ゐ方寸を明〜ゐん。見只沛運のまゐとてそゐひちゐひへと密
ゐる諫ゐゐ蒲殿頻ゐ嗟嘆〜て遂ゐゐてび爭ひゐハゐ當下稲毛三郎ゐ
兵士ホを促〜て早せゐまゐ張興へ葩頼朝臣を接〜て来せどく行ゐと

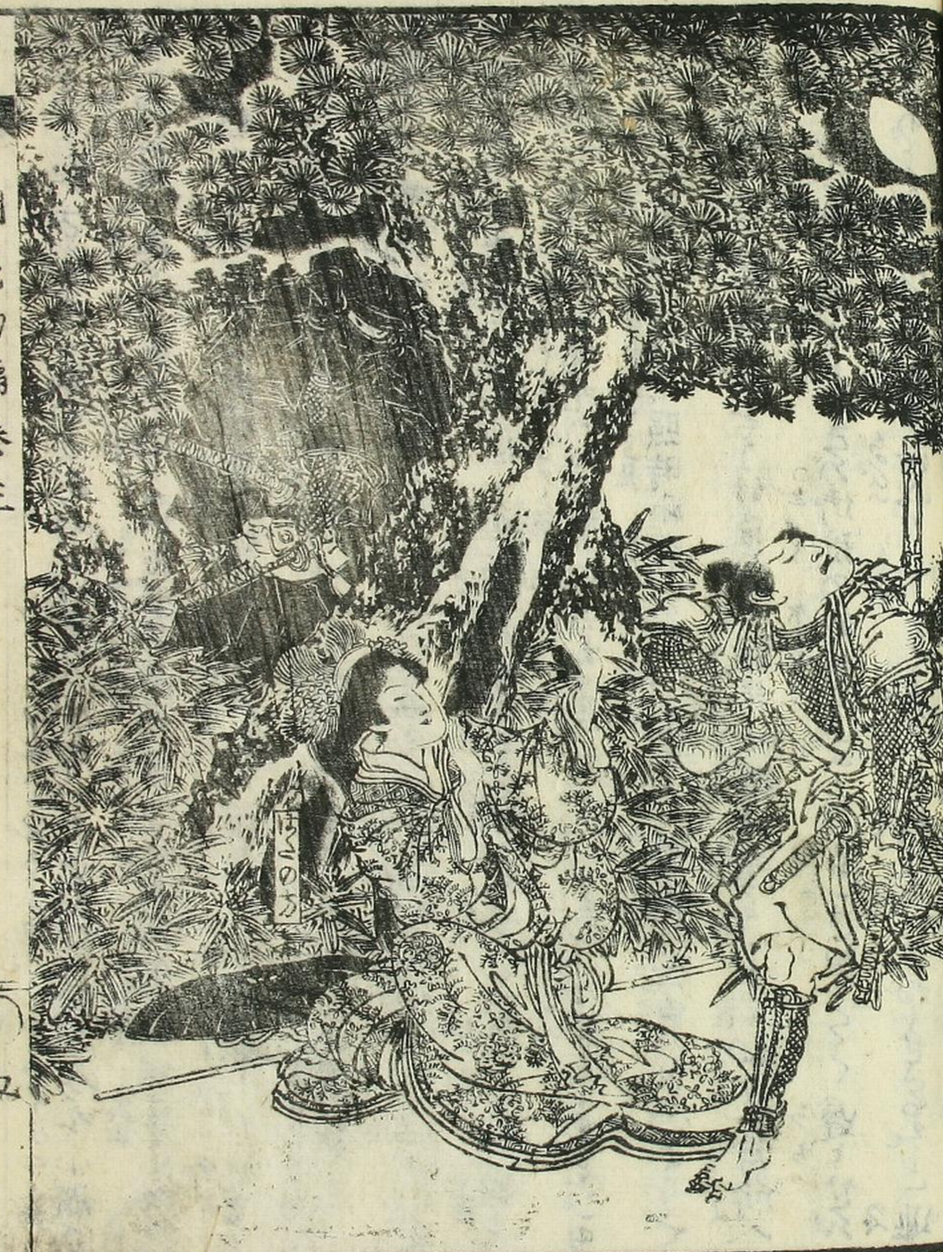
いそぐ〜立ゐゐ蒲殿の後者ホハ果ゐ果てゐんまゐ〜ゐ皆ゐの死ホ抑當
せゐゐて主君の倶ホゐうゐとゐゐゐゐ中ホ重能ホ老堂ゐ石堂六七人上の
先途式ゐるとゐゐゐゐ。ゐゐ腰式切ゐんとゐゐ彼必死の面魂倫ゐ
がくやゐひん。重成僅ゐとゐて式紆〜て輿の後方ゐ立せゐゐ現入間ゐ
栄枯得失今ホゐゐぬゐゐゐがら。きのゐハ幕下の連枝とて。車馬門前ゐ
市式ゐる死左衛舎の大小名愛敬渇仰せざゐゐなく。けゐハ美里の囚役と
ゐゐまゐさゐゐハ恩顧のゐめゐゐ憂式共ゐゐゐゐ稀ホく親〜死武者ゐ
ゐゐ〜ゐど袷といひ袷といひ歎死真蘇枋の繁芒尾花ゐ袖ゐあくゐの。
乾く隙ゐ死秋の天ゐ。ゐ〜ゐ果ゐゐ族宿〜て足柄越ゐその夜ゐ明〜次ゐ
日のゐゐゐゐて修吾寺へなん。ゐゐゐゐ〜ゐゐ相ホ濱の宿へハ別ゐ対式
向ゐゐて北條時政の内室牧の方ゐ後者ゐる刀野儀杖照時二百餘騎を引

幸しくその夜亥中の比及に生浜と推よせて蒲殿の夫人と白旗丸を捕ゑて逃しぞ。進めくと令きまべ。早雄の武者四五十騎閧を咄とつくりまく。前門乃橋うちわたしくをや追入らんと閧きまかるべしと豫より思て人数し館の老黨橋太左衛門尉高保。梓治部丞有友ハ前後の門戸をさし固めて雑兵を罵激し。矢種を惜ずさし詰ひき詰散々に射けれバ隊伍おちの乱れて進ミ寄るの兵士五六人橋のうへにて射られけるとて死けれども大勢ハ躬方乃死骸を踏踰て透間もなく競ひかゝる程らはへいりて防戦ふ高保も有友も大剛のものなりけれバさらにひるまず戦ひけれども館ゐる兵士ホハ素肌ハ物具さる隙もなくにあれバ稍と高保ホが援はて對応の軍ハ要せバ蒲殿逆意ありと事さぐるよもなく罪状あからず今けそあれのちのちにハ黒白ハ志らぬえてん亡ぬべしと。俺们留まるにあらずからく主命を受

ぞしく。夫人孺君を遁さんや。弓箭とる身のならひとて。ちん使を阻ぐハ己が罪ならざらん。かゝれバ今霄の戦ひに皆物の具をもべからず。これ是らが主従に同よりて逆意あるにより死後に志らせんなるぞ。あの君所にゆかれ。蒲殿の外主君へあるしハならぬなれやとく隠るゝ踰し激しけれバ。志気あるものハ義を金石より重しと。身命鴻毛よりも輕しとて素肌なれども。矢石をおそれず。號叫て戦へども如法闇夜のこなたのぞ溝をこへ塀を乗る寄手ハ竟に撃だるゝ数をもしらず。敵ハはや乱れ入て彼此に火を放ちぬ。秋の夜風の烈しくて猛火ハ焔に燃揚れバ奥なる婦幼が煙に咽て叫ぶ声阿鼻焦熱のに異ならず。そのとき橘太左衛門ハ雑兵ホに防矢射させて塀の下を潜りつゝ後堂へ走りけれバ。孺君をとるなれバ白旗丸ハつれなきさせあらむと其処ゟ彼処へとかくる遑るに治部丞もこまで來て手に拿しく数个所の深疵を負ながら給の

間の屋とりかまへ橋太左衛門遥かに治部右衛門殿やと呼かくるを聞く近より七。
左衛門和殿由孺君のもん往方を尋ねさぶ欽否孺君のこなくまど幡太の方も
やつよきびとつが有友さまびとよ侍女們よ等同ハ曩かあや兄弟士二人夫
人を小腋よ抱へて走り去らんとせ所かれ側よ侍りこ所専女小臣後女の
童命限りかは替ハ件の癖者些も騒ぐ。これハ安達盛長ハ。藤倉殿よ
密こかもあり弟受かひく幡太の方を迎ふ所ぞといとしあへぎ迎ぐ
かの狐疑ちしく外面へ走去ねと告げよいよ安らぐ孺君いらかぞ。
と問ども去ぬかの絶てるの。とつが高保うち驚き安達氏い夫人のかれ親家
るまぶさとかやなん孺君さよ奪れてかの死しても不覚の罪い脱きび歟内
外よ充満さ剛猛火かの包まれが為しかるまどぐうとあらぎ偏よ夫人孺君かの
自殺を勧めたり死出三途のかん倶伎せんとく。かの後よ
あらぎたるかの死ん今一ト戦懸散しく。かん往方を尋ぶやとつが有友いかのや及
ぶと去てかぐて出んとせ所両個ぶ間へ尾落ぎと。と落る長押を薙刀よ受て
倒せば裳と散る火花よ似る業武者ども烟の中かの乱よ入ぶ撃んとさるを。
高保有友左右りかの受ながら両人齊一閃を刃の下かの彼軍兵かぶ首ハ飛ぐ
礙と落ちいとも烈しく死大刀風よるの焔うち所火気煽さ大かなの火と寄せの
軍兵逃げ武行ぶと追蒐る前面かの落る梁かの治部右衛門を肩をうこして半
身既よ焼爛ぶ技起さんとせ所高保ハ簀子よ足武踏をとこく火焔の中かの
礙と坐しあらぬ朽ちやを念やと迷よ声ハかりせども腹切る隙もあらばとそ。
あらぶ一世の功名ハ夢のかへとと立のぼる星や長安三月の煙を感む両老
黨ハ数奇武盡せし大厦ともかの灰燼となりてく失かけまかりまし祝よ対
てかの大将刀野保祝照時ハ廣庭よ馬を乗きえ兵士ホよ令せるれ。敵とも


敦俊と
黙して
時
幡太
の方
伊豆新之助



こんこんとして躬方ふあらぬいとあやしげなる武者一人蒲團に居女房を小脇に
楚と抱きたり。奥より走り出て矢庭に遮り留させその来歴尋ねに彼
武者驚く気色なく。これハ安達藤九郎盛長が家隷に伊庭捌九郎敦俊と
いへる。蒲殿のもんこうハ今更いふに及ばざる夫人幡太の前ハ則主人
の愛女に白鳩九ハ外孫にともかくもしてこの母子の命をせめてもとて功かえ
所領なか元只管敷元ようせーなば鎌倉殿聞食勇士も老たる恩愛乃奴と
なるべきなれ。但白鳩九ハ頼朝が仇となるべきなれば助命の工夫也
うけがごそが母ハ仔細なし。照時に吉を使へよとて赦免状をあたへ
某この條の火急の使者をうけたまハりて駿馬に鞭鳴らしてとり當所へ
馳せ〜ば合戦の最中なれば街道の超生居なりとて遅とせば
過失あらんとやうへば躍く潜入り辛〜く夫人を救ひ出まゐらせまと逃

げて衣領を掴まる。赦免状をとり出て。遽なんとまるれなる照時ハ馬より下
りて恭〜く拝てかくかくと何様に疑べ元更聞さるる和郎一人俱〜まゐら
せんハ心うけ兵士ホ〜く送らせんとのたまへば敦俊既に掉合戦勝利さるまと
いへども宗後の武士ホ縁伏せざる。去る所より今軍兵をこうちゐるらんとおもふ
ゆゑ某ひとりとまゐりたるとも。こうでふへるひべ元と推辞てまべく夫人と俱〜な
らん。とのたまへども幡太の方ハ泣沈て。意ぶかーのあまど呼夫と後生子ホ別れて
形ちを元世ふ口ハ元とて在命るとも何ゆゑせんそ是ハ親のれとろホ隠ふを
こゝろぶよる所只二の侭ふ棄ていれ猛火ふ焼ま果ホ元と聞ふなば却させる
咎ハあらじうとのたまへども又泣ふべ。敦俊声を激〜く諫ん嫌〜んとるまと
るとも扶起〜く遽〜く外面へ俱〜まゐるまとまへ照時是を送らんとて。眠
近元兵士の手ぬく門前まぐ立出て。一町ばかりまゐる所を〜く弓ホ前刻

弯固め弦音高く、弾ど射る矢坪違ぎ敦俊ハ七九の命絶えうかくまでホ。
嫌鮫く串れ苦と、声叫びあんぐうつ傍ホ仆きけ是照時ガ兵士ホハ是ハ絶
ゆること〻ん。一人大刀を振翳しく驀地ヨ走ヲ駆り。敬馬劇こく足久ヲ奥。
幡太の方を捉く推伏ん頸式ヲ死砂く立あぐうんとまる処式覆面ゑる
一個ロ武士並樹の蔭より走ヲ出く。肉を大刀風ヨ彼軍兵ガ頸うち落し幡太
の方れん頭ひろ共頭髻短ヨ引提て。跳式暗し逃亡う。照時ハ是式ん
彼脱ぎ。ヨと主後四五人透間もなく追蔓こ〻ヒも如法夜なれば意ホ
及ぶ幡太の方と敦俊ガ死骸を竊ホとヨ隠させこのヲ努こ沙汰をヲと
兵士ホヨ密語く。又門内へ引かんを。照時ガよころの中伴ロ眠迫兵士ヲ
で。ゑるめ絶てなるヲけり。かくく高保有友ホ宗後の武士を討死し婦
幼ハ煙ヨ呑び火ヨ焼ヲく死を。ものぐそだくそとのの式ゑらぐ辛して

脱ぎしハ雑兵ホヨ稀ヒ。さ所程ヨ刀野傳伏照時ハ是ホ軍兵ヲ部して。
白鳥丸を徴索ヨ猛火ホ焼ヲ。ひろん。この処より後たるヲと所ヲ蹟ヲホ
ゑえざるを。ば焼ゑる火を滅さこく賊果ヲ亡骸式此彼と展撿しく。
橋太応備門治部恩ホ宗後の武士の首級式蔵し。勝閧三こび揚さして営
中へ系所程ヨ天ハ不めぐと明ホけヲ。業下某生再視範頼朝臣ハ。おひし
がけるく。又さこホ。後若寺へ閉居こヲ。日影まのち所後の分を置ところ
なるめこく稲毛三郎重成へその日よるヲ駆兵ホしく。前後の門式固こヲ。
庫裡ヲ文容殿さ人問ろの〻時ヲのくうち巡ヲ。さ〻も名こ所潰仏場ヲ只
彼地獄ヨ異ろ〻ど大夫属重能ホ近習の侍ヲ所ヨあり後ど貝式ホ。口式
開式ろこハ慰ゆ。ろ〻ハ〻ゆかろのハ。主後憂苦ヨ日をかこ祈く。五六日を
経所程ヨ有一夕更衣人定り〻。容殿の壁式果絶こなこ人潜ぶ。ものめ

あるよ清殿ハ重能と夫人のうへ孺君のうへなど思ひかくやあらんとくりかへし纏ひくるしさにまどろまず比しも八月廿日あまり。皎々たる雨後の月隈なく照らせど紙窓の下に立在む人の影うつる故重能ハ怪と見てそれハ何人ぞと咎れバ答へもつげず其人ハあらじと密やかに回答て右に立たる杉戸をそと開て。身を横ざまに裡面に入る故とかく見れバ是則人なんなれバ江満入廣道之顔容ハいと寠て脊負たる袱包重げなるを解おろしておん前に跪て居る。おもひがけなき対面に花顔は懐しくて膝の進む故覚えずも爺人卷てありし歟。白妙丸いかにぞや。從ふ人の隙なきにやとて来たりしと宣へバ重能も声をひそめおん留守の間は高保有友おん倶に和殿と某預りて定め置る處に和殿ハ後まてく来らざるちかき疑ひをうけて廣道うち忘れたる却ゆへ恩義に背く逃出や去つると思ひけん某がの日私宅にかへりて。

律をとてのへんと去給ひにけり。君ハ出させ給ひぬ途にて竊に俗を古寺へ遁世ありといへバいそぎ追つかんと只管に走れども。幾里かゆきけん日もくれたりかくて夜中の比及に町屋川のほとりにゆく。途に孺君ハ落させ給ひし処の宿のうちに當りて火起忽地に天を衝き鎌倉へとて走る所の徒ハ正しく兵火ぞと罵るに大かたならぬ人々にあひたまへバ其執しくりかへしかく世の禁に違ひしと館へハ刀野の徒伏に照時を大ねかく軍兵数十人向られ橘太左衛門治部丞の雲時ハ防戦ひしが火攻せられて竟にかなはず。悉討死せし事果る比某ハからくも走り去り捨べき命なれバとおもひかへして裡へ入りて不思議に獲つるのちハ藤澤わたりへ退き世の風聞を窺にけれバ當麻太郎武弘ハ営中にて誅れたり。この旅にて隠謀分明なりと沙汰せられて。おん身のうへに及べき故え奥さるの孺君なる人。

又武弘が為体さいあまりに猛近々まで息率ゆへ述べ侍寝所ゆく告
ぎらん。明日は鎌倉より。使使人来の沙汰あれば寅期のあん供せまゐらくて。
今朝より寺門式徘徊し。夜の御所まく衛所人の隙式ゆくやうり式と正頁に
告ぎらせば蒲殿は此の命を果を果く嘆息し。重能は廣通が先見智計式嘆
賞し。當麻太郎を置ちのこ又せんとべ申なるとけり。かくくその結豆稲毛
三郎が鞍兵ふは範頼朝臣の近臣の一人増さる式こ蒙式驚式矢庭に義
人廣通式引出さんとうしまとも廣通は些も動うべ某々は鎌倉殿さ所
のあるまと知召。江義人廣通なり。主の寅期の供をせんとてくるべと来
るる式不覚に入まてく今更に阻んとまとるやあるころしとゆうべ来る所
とたるのどく寺内へ入れさるぞ。ちらぐどとのうべ各位も怠慢の罪脱きべこと
けん。さても脱る時あるまや。と同指られく理ゆへ行覚びこのあ一人増さる

とも何程のあらん。毛を吹く疵式求んよる是只うち捨ておけやとて皆
吐式退散ぬ。その旦當寺の住持は常よりも町嘴が蒲殿主後式管待てえん
うう蟄居の憂苦を慰めさてうう中。今日は鎌倉より。使使来臨あるべ所
豫くその沙汰ひひたうち篭りてのみ在せしべ垢つ所く対更が焦悴さ世
るひがけまちん浴さ必へう。知召るべ。當寺の温泉は萬病に治ざると国山門
の前を川の真中より涌出る式独鈷の湯と唱做せり。むへ高野の大師當
国が券縁のあらう。この地の温暖なる式ひく国民ものくく温毒をやさ所式
憐て裏の岩窟が引篭り。加持ゆるゆへ七日七夜食べ居独結を投ぶば
この山川が微と為さ。其処より温泉涌出せり。その後里人石をひく大石
をひろ独結式造り。件の温泉のほとりに立てく云云と名けり。偏に大師の
大功徳を亡ぶとのあるが加以川の上下処々が出る湯あると石を畳て湯

桁とこと細小めゝと人浴ぐるに八牛馬の足洗ふ今の尼土地小益ある
るゆゑ八人のうへなるべし牛馬六畜庇を蒙る大師の恩徳莫大に現る
て玉玻浸ゝと試る小間僅小三四寸外面八冷水に其処より内八温湯に不思議の
るゆゑ八ばや當国なる熱海の温泉八朝夕ゝるゆゑ時を定めて海潮の中を
涌出すゆゑ熱海と名づけたり唐土雞籠山洞中の潮泉粗これ小似たりとぞ
又江乗縣より出る湯泉八半冷小半熱ゝとの事なれども我独結の湯乃新小
あらべと見へ精細に絶せらる範頼朝臣うちゆめく現近めと流る
水八夜とゝく日とゝくかへるとゝ又彼泉の温なるに冷なるゆゑ生死に拘
らず けゆゑ八ゝく範頼ゆ冷泉に入る時なるべし禍神の祟小や分の濡衣を
乾あへ八ゝの孔後まぐれ恨るまども仏縁まりて霊場に終ゝとゝろ八せる
ものゆゑとゝそばゆなるに不二法門の不可思議なる今小ちがあぬる

るゆゑ分の憂と死八ゝるさも八ゝるよゝく森ゝ先ぐちゝ居めたが結ひて
ゆゝんかまべ一蓮托生の引接を願ひめゝ他ゝもなくゆとゝと正首小回答
玉ふ光期小辞小あゝるとゝくいとゝも哀れるゆゑゝゝ住持いよく叮嚀に
一念即身即仏の功力を勧めゆひゝゆゝ秋の日程の短くゝ来れあゝ下居比
淀使入来と見び続声小外面俄頃にさゝる立稲毛が家臣小案内させく
清基居めの八狩野次祐茂宇佐美三郎茂光なり同毎ゝに先を追てゝゝ
客殿に進ゝ入り預人稲毛三郎八外面をまゝるゝべしその時に蒲殿を礼
服を整ゝく恭ゝく生近遠路の淀使俄頃の来臨ゆん疑ひ玉蒙りて閑居ゝし
ゝ居わるゝべ歟待ゆまゝるに使幕下八いよく差ゝくまゝゆゝと同せ
ゆゝ祐茂八大紋の袖に紋合せ淀意の趣怒げゝゝ私の回答八まゝゝ抑此度
吾何両人ゆん使玉蒙りゝ農商せ八別義小あゝどといゝに範頼席を更め

くは我君を低く見て祐茂ハ茂光に会釈して小膝を進め疑意の事も別
義にあらず参州家との日ごろ逆謀の兆しあり。去るといへども骨肉なれば
又年来の軍功あれバ明に地に虚実を正してふかくその非を咎めあるべき所
後事を懲んために對面をのみ許されざりし逆心をいだく己と死なく家臣
當麻太郎をめして幕下を害しまゐらせんと詭まで伎倆るを覚て當麻ハ
即座に誅せられ勿論その夜の為か當麻ハ浅痍を負しかバ脱れがたくと思ひ
けんそのまゝ自殺して亡れバ渠口つから主の悪事を白状なくるにあらねども
渠が帯たる匕首ハ伽羅丸と名づける参州の重宝なり原これ文左曲ハ厩
戦より相傳の名刀なれバ幕下も認りてうたがひなき給といひ恰といひ問ずして
参州の逆謀既に明白なれバ是をしも罪すべくんば何ぞ忍く天下に示ん王
事盬なし公道に親疎あらんや。この故に濱の宿の第へ討手を向

られて宗徒の老黨みな討れぬこれによりて異なる國務を許されてける。
宝飯の城地を召放し彼匕首を返しくださる。あん光狂ひへらしと言委うく述にけり。
當下宇佐美茂光ハ携へ来まゐる白木の筥より彼伽羅丸をとり出しく左
右を信とゑとくへ巳に稲毛が家臣ホまつろ拐く足打の三方に件の刃をうち載
て蒲殿へぞささえまゐらせける時に左右の腰障子をおろくと推開て江灑口
藏人廣通大夫属重能ホ老黨若黨をえて七人みな礼服を整て大床に
並てとり。両使ハこれ何ごと思ふへつまく何事のなりゆきやと外理るかみなりつたれ
渉我低これ参州恩顧の者の小江藏人廣通大夫属重能後見十郎員
幸。名栗節平元廣矢刎二郎景氏五十良小三太季宗菊川番作良忠宗
主君の先途に外となく推参してよびし黄泉乃供をせまほしく
ほとり迫く祗候せるなんらの事を我家らんといへバ祐茂うち点頭現参州を

怪善寺の範頼死を賜ふ

江ノ島人廣通
大夫屬重上
世間の上
世間の上

幕下の連枝一人四の受領さうよりやその罪あるといふとも死に預ふあるべきらんやさんぶのこの式何ところにひまんぞと同ハ茂光沈吟す。とまうさんかへ某も豫く光期をせざるとも後難を憚まく許さべるべくハ武士の情をもくぶかりかり彼ホを迎く待ちしまくといふ声仲して廣通ホハ赤臣と思つく。おそるく席式せくめく主の左右に居るべきまこと。主の左右に居るべきまこと。かつて沼に範頼ハ彼伽羅丸の匕首を左ひかとまく。うちかつてうちかつて右ひかとり。この期ホ及びく家だりもヤコくべ死よりハあらん。と家臣當麻武弘が營中へ参まこ。つゆハ範頼絶くこと式式きくさど。但件の武弘ハ勃梭の家臣とる某甲ホ所縁あり。これらホ就こうち敷元恩免の海汰ありやなりや。密ホ問ばくとひしるが貽くその後に任せしのまこと又この伽羅丸の匕首ハ聊賞まるよりあまて當麻太郎ホこせしぶまさん緯の證据とちのまく欲さるところ範頼が逆謀ホ決らぬ素より不忠式存せばしく。反逆の汚名式獲さり。是只過世の悪報欲うち歎くみを

あまりあまて両使ハ何とぞかせうん。こハ範頼がうへのこころのうばしく鎌倉殿の不幸へ。義経といひ吾侍といひ順逆定らぬうばしく忽地に裁せらるるを分みばくこ枝を伐又その翼式断ぬうば。誰ら亦ハ子孫の扞城とのりて寂を禦ん倩りの式葉きとるまて祖父判官殿のとこ家宝の太刀の名を更めく友切とせらまて故証保元の播乱ホ父子兄弟戦ひ分ひ死かくく亡兄源太のねーー孫ハ叔父帯刀義賢を殺ひ平ハ叔父ひひねとの後平治の兵乱ホハ頼政もとり平家に属く一族の義を顧を文治ホ義経討まと今茲ハ範頼死を賜へり。翌ハ又雑ぶうへうん一家の臭ハ絶べくば。先祖の失ハ論きべくくど範頼実に野心るるーーその罪ホあらぶーく管叔の罰式被る。そをとくくめとハ出ハねども子孫の扞城を喪ひ逆臣とさく隙と覬ひ幕下百年の後に至ぶりくく緒呂の禍あらん。五侍呉子疋昔ぶ才るるまこ。

後までも東門に服装掛けてあら祭ど先霊誠を監ぎく不憚に殺さと
咎めぐわぐ幕下の子孫この寺に終成るのあるのやせん。悲しきと靡なく
鞆推立ち七首を覩つるく身とを高へ。鬱憤気に見きてり。鳥の死ん
とさるとなるこの鳴とのとうるく人の死んとさるとなるこのいとと
なん。この君先見あるふあく祭ど。最期の金言果せるうゐ是より十有二年
へ経く元文元年秋七月十八日のうるとよ。幕下の嫡男頼家朝臣へ梓弦北條に
棄れてこの修善寺へ推竜らに浴室の中ゆく害せら輪田応報おそるべ。
間結休題。且く範頼へ祐茂に対ひ云ふ死導言今さるに命を
惜むのとやいらまん。そへとまるかくもあるに疑使に憑む一義あるに家臣江藤
人が不思議に思ふなるのあなれ。そ弦鎌倉へ進ぶせたやとおりなといと切の
さるとてもうちけめへ憚あるに豫ふり。當寺の住持に委ねも死ぬ鎌倉へ齎

ちく。披露しく賜ひ祭と他るもるく宜へば祐茂茂光のろ共にそれへいるなる
物なるまやいひるまへがくるに。当寺より進らさるのとていつ何歟ん
ちろるくひとまるせばうち点跌そに。やるく安堵とり。両使えとづけひへと
いひへど白玉垢の袷の襟弦推中ゆ。二ッ三ッよろ祖ばく。衣のるに白死膚をあら
ア。彼七首をうち戴き刃を袖に巻そそく氷なると刀尖を尤の肚へぐさと
立小膝弦衝く右のくく一文字に引ぬへば鮮血さつと潰りく雪と欺く白夾衣へ
飾磨の紅褐と染ちの如り。後に入せ。と廣通重能刃を逆ふに抜ぬちて腹
かに切く刀に祖に。後見員幸名栗元廣矢矧菊川五十良子季宗腹十文字に
切るもあるに或へ赤刺ちぐへく刺ちぐへくぞ臥累ぬ主従八人算を乱しく屍を
秋葉の霜に散死血へ赤野逕の花に似くり。三寸息絶ぬへ萬事休とと旅魂
今夜いぐるの宿に入らんとぢうく哀れ。かくく祐茂茂光に蒲殿の

ちん顱頭とゐるうまく。稲毛重成ゐろとゐふ鎌倉へかくる祖子住持へ件の送物を齎しく。使子跟元て来ゐるゆゑ。ちろ丸ども実検の義ゆ及ぶまじ。首級を寺へかくさせゐるひとく。土役の二艘式莽らせゐひ名丑よりさ彩子祐茂ゆ絶報自殺の為体と鎌倉勢へゆえあげ。修吾寺より進よせさる件の送物をうんせ奈ゆこの幕下の左右ゆ稲毛三郎重成安達藤九郎盛長結城七郎朝光海野太郎幸氏ろん候ひる。頼朝卿ハ委細子縛の数式聞召く。彼送物を齎ゆ立ゆ二尺あまるとなる白木の櫃ゐるゑ蓋ハ釘式ゆく打ゑて八方子封度式付さり。躰く海野幸氏しく。披して御覧まるゆ。夾服紗子包るのと一通の書翰あるけゑ。あづ包ゑ物式とく。服紗を解しくゑ見へ。年三十ばゐるゑ女と。丈八九歳とおぼしき男の生頸ゐろ。輾出ゆ。ゆひゆけるゑ元ゑなゑ。衆皆呆ゑて目を睜り。ものく口を鉗くとりさるとけゑども幕下ゆ。驗元くる気色もなくその状続めと宜へ。結城朝光うけゐろまく。声高ゆゆ続ゐどゆ主従耳を側く。

齊一ゑ式うちゆゆバ

範頼謹白昨　尊命反覆見謫干豆修善寺。
今又両使到来賜了厲婁臣非其罪被莫大之釁。
幕下責臣以武弘狼藉。臣何為知之。雖不知。
疑似不能辯。以貝錦成章之深也。願武弘呼為似児戯。雖至愚。必有縁故矣。速令捕之。而不拷其詭秘。問其来歴。先者不甦。罪歸乎一人。固非公道。庶聞臣踰足柄之日。
幕下使刀野煕時焼濱驛第荊婦父安達盛

長聞之不堪哀悼造於営而乞命。
幕下辱賜書以赦荊婦盛長則使私卒伊庭
敦俊傳赦於照時照時聽命不能阻之竊
殺荊婦與敦俊嫁之于兵火是夕家臣江賀
通者不圖而與此抵觸復怨於其後者而奪
去荊婦頭顱携来而告臣於是乎肇知危臣
者蓋照時之徒也然而私臆不敢處獻其首
二級以乞鈞裁一則荊婦首級也一則照時
幕下裂然高斷鋤奸解寃臣死且不朽古語
有之叢蘭欲静秋風動之賢君欲明讒間蔽
之悲乎哉三致虎於市則人人必信焉告曾

参殺人其母竟投村臣富附驥之功久杜患
之備狡兎已盡良犬就烹不及者亦如此臣
臨終不知所吉訴緘怨以遺訴縮流憲覽
不愆幸甚

建久四年癸丑秋八月　源範頼再拜

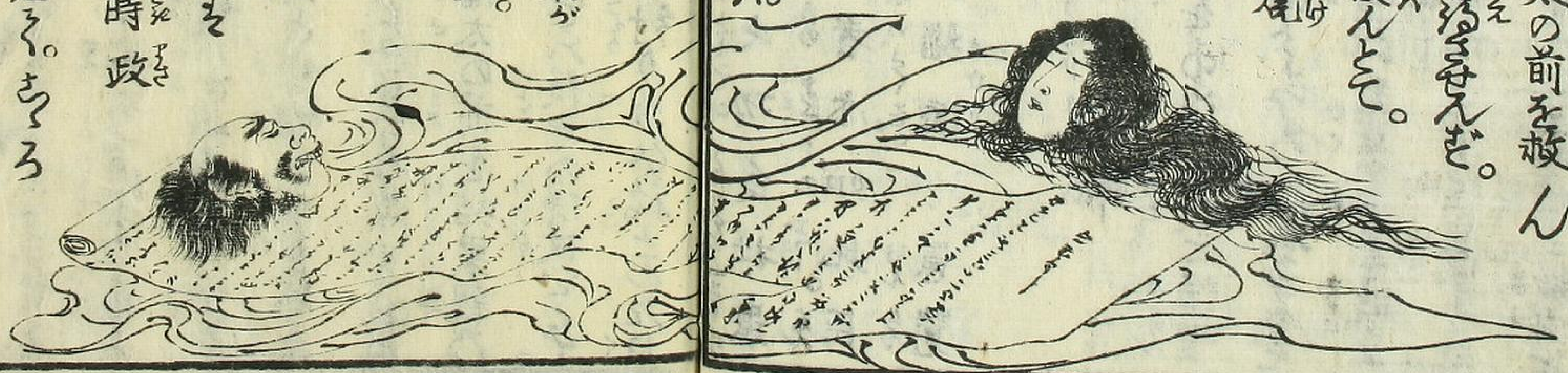
とぞ続ける。現続むりのも笑ものの。悦怒とく〳〵面をあら〳〵光ざ嗟嘆
せざるべかるの〳〵。頼朝卿へつゝぐと聞ろく眉を顰めあらさろ沼ねるもぞ
あは藤九郎ハいかゞ。と問せ多べ盛長ハ席を避て頼朝つ死愚意も誠よ
御縦のごと。その夜さり御教書を齎して遣〳〵ふ。敦俊さんハ火ハ焼き死。
と人もらひ我もらひく。けつまくくひ〳〵ひ〳〵御縦よ違つく。幡太の前と敦俊を
害〳〵ふ。照時ゞ公の底測ざくひと発式會く回答ちう せべ。うち点ゞうるひつ。

さればとよそのゝち照時がはかりつるハ闘戦既に勝利を得たり。ちや火を
放ちハ比安達が使走なして御教書を遠く手せしめバ幡太の前を殺ん
るかろのべきもいかゞ。焼落て後髏るとも索ね出して得させんぞ。
と諭せども彼使者ハ一切に是をうけひかず。彼夫人を殺んとて
煙を犯し猛火を凌ぎ後堂へと進みしが。つひに果して焼
亡ひたりと実しやかに告しかバ汝にも云と遠示せしが。
奇怪のことな照時を召よせよと犇せられて言けるハ
また稲毛三郎ハ遠侍へ退出なす。

初輯第六　截落を刀野斧
久汝に返る湯嶌檜

稲毛三郎重成が妻ハ頼朝卿の北の方政子の妹なりけれバ。

時政が為にハ女婿なりし。これ恰といひ勢利に任く
めのハ青雲の楷梯にせんとて志念を運ぶも又渠が
虎の威を籍りて無礼をとれるものハ然るおくとおもふに。
さればハ稲毛三郎ハ幕下の気色平かならず。刀野儀杖
照時を召せよとの御諚を受奉りて遠侍へ退
出しが固より然るべしと思へバ。そが随御諚の趣を照時へも
告やらずこの條の趣を密やかに書写めて腹心の私卒して時政
にぞ告たりける。却説北條時政ハ女婿の稲毛が密書をとりて。さてこそ
忽ち姿をも膽て内室牧の方に如此々々のことをそおもひいふにせましと耳語バ
牧の方ハ聞て照時ハこなたが従弟又重成ハ女婿なれバいづれも疎にハおもはねども。
従弟一人ハ惜むに足らず。口ハさのみとて彼人禁獄などせられて呵責に沿ん坂を



実は咄べ申し丸大事に及びなん。深念しゐへとりのよ時政沈吟じ曩に
刀野傔杖を濱の宿の討手にゆとそく猛き彼処へさし向られし。そのとき安達藤
九郎只顧に慈訴して白鳩丸と幡太の前の命乞をまうしけれバ幕下ハ渠が
女児なる幡太の前の事ハ免しつく白鳩丸を赦しあるまじこの旨をゆるえさせらく。
赦免状を賜りけれバ老臣ハ悦びあへる娟くぐしく宿所へ退出て竊に
おん身に告しけれバおん身且く尋思して。安達が女児幡太媛ハ世に美人乃ゆゑ
ありと我ゆへその初義時が婦にせまほしとて此彼と媒妁しく給ひえ
品をかへまして。婚縁ハ已に調ひたるよ安達ハ一切兼引をととのへんようしとの
むかへに蒲殿へ進らせさり。かれが今この時をうしなひ幡太の前を結果親乃
安達よらへぬハゑんせく。遂恨ある彼ゆの我さへ後弁の傔杖をとて。
彼処の討手に請ゆらして遣しぬ甲斐ハるし。ろゆ又討りぬる禍とかえ只口く

説ゑてくうちも措きて腹立しさもいやませバ老堂湯薬進しくやそや
井立に照時を追懸させけるが桟密を告計策を密まりに説示させておその
夜安達が使者のうち共は彼婦人を結果せ宿所ハ復せしとおもひしそらさのぶ
ゆく照時鈍くも證据を取られて縛えや露顕なりしが今さらにせんすべも
なし。薄氷踏つも只成敗ハ時宜にまかせんもん身をおもふよしのなりやと
何ハ眉根ひそらち顰めさまとても命も空しく傔杖は諜しあるせまたも後悔
なくそ待ちまでし。ころ子なるが義時ハ才長たる男児ゑ相譚しつゝあるがこの旨
時政ちら見ながらも出て義時を閑室に誘引ん親子額つき合せ時政ハ
件の趣おもちもなく説示して計略を求しが義時ハなく嘆息し家為一人を
動されハ挑しく事ハ討てそへ人を擇せぬる程ハかくる禍胎いで来るべき最ぞ當
麻を詐敷りて営中に潜入せなひしとも某彼処まさむかれど當麻を矢

疵ハ生捕られ鞫問せられてその餘殃これが大人にぞ及ぶべからん某これがために
故に當麻太郎に痍を負し。當座に殺してかひなき此度のことハそれにてもよし。
輙く脱れ得べきにもあらねバ彼鄙語にいふなる腹に脊ハ代がたし。大の虫を助く
べくバ小の虫を殺せといへり。愚意にハかくこそあれと思ひかへして照時を指ころせ。
力士をもてこれに刺せて。彼かの密謀を頭のよしをいはらせて給へなるべく脱
隠し路るゝといへども自殺してひと幕下へ申あげなば君ハさらでだに雑文
これが大人を疑ふべきもあらざるとき八安達が恨もおのづから解ざらんや。照時ハ罪
掌つらて。自殺せしといふとも。所領ハかならずも召放されなん。これが大人私にその
子とその笠ともなり。杖ともなりて。扶持しく親が身となりし崇をうけて
これが家に係る難義を攘ふなぞ徳に報ひなバ渠が子どもハことごとの情
由を後にやうくも告しらせて只黍く思ふべし。と。彼小の虫を殺して太の

虫を助るなりと照時ハこれが母の一族にしあれバ不便に思召べきなれど腹ハ背へかへがたく
遅くなりて及ぶべからずとせんかたなくいそがせ給ふ方ハ思ふまゝに艱わからねバ愁は見
向されバこそいかざる秘め一義時識ありせバ再度の難義を脱れんべく躊
躇なからるとめる共に鈍めしからバ時政も息つき義時が計策をとべくから
これが意に稱へり。さらバ彼傔杖ハこれが妻の従弟なるがさうなくうけもひ引
ざりし。かくて又再び何がの議せん足るなりとの議のく。照時を召よせてまさて
維に分付て傔杖を刺させべきといひ義時がおくせず維ゆきと揮ふまゝにも
ひそかに老黨湯嶋杢進基勝ハ拳法相撲の技に長たり。十人がちからあり。
かつ且は當麻太郎とその師弟共ゆるしく武藝を習ひ送りけれど勸めじと
勸るゝ義にがらいへり。さるも件の密謀を渠るるほどにて志あるなるべし覚
ゆへいかにぞや。とまかでたちて耳語ハ時政ながくうち点頭て現かくのごとくてそろ

るまこと妻ハ太立進ル縁由を示し申し候時ハ人を走らして照時を召びに遣わ
いそゝと焦燥ハ我の方ハ基勝ル説示んとて潛かに蒸襖と推開て出居の
かく入走らせ去り候時ハ小棚なる料帋硯をとりて認しく墨摺たる
照時を招たよりて書狀を認めて招ル迎習某甲走り来て紙門の遠より
さ一歌て敷ゆハ其処より出まとや刀野どの来ませ一と告て伺ふく時政ま
夜といひつゝ候時ハ目を注しく刃と起ル如ハ風ハ吹よ出て来ル出ろくル
さてや来たり牧の方ハ基勝ル加の紙を告し欲ルとるいでくといひつけて書院の
かく入却ル候時ハ書も認果ル書狀と細ル引裂ル推園て袂納ル縁頑ら
遠ル出て客房のく入いやれぬ。さる招ル刀野傳杖照時ハ両三日良ル分れて
執権の安不良候問ざその急り候賠話んとて後者ハいと者器一とのと死既ル
詣来くると固より通家のとゆ一あるハ後門より進入ると當番の若黨ハ

門ゼ出迎ハ客房へと誘引て且とのよ候まうさんとて出居のく入退ル
ちそらくちく奥のくより傳杖ちくとそ来のひぬちろく入りくらぶ母ル
對面一ひねとゆくる声ハ出くル候時ハ照時ハ阿と意あ候刀を引提て
只ハとるゆる方とゆく招ルひゞけなく左ひル立てる金屏の背ルて
當家の老黨湯崎基勝刀の下緒を裾ゆく袴の稜を高く取り蟲のごく
飛ろくく照時ハ手ゆと組む候狼藉やと照時ハ振解んと身を反て既ル
利ひを取ると一ゝ。そゞ仇四ひルこり合ちそ一ゞ招ハ挑一ゞ抜ル力も
遥ルゆ一た居湯当ハ物ハ仇ル照時をつらしく軟居処を標仆一躰て脇
のそ一懸く短刀を引抜く頸ル招ルかんとる招ル反張ルるどのかのゆやあ
けん忽地ル脇麻ルて既ル刃をさ一ゝるのぐ。さべなるとけるその隙ル照時ハ
伏つも腰刀と引抜く基勝ゞ太股より小腹のうへまぐ一ぐさと刺一反ゝきんと

父子相謀て
時を
刺む

さきのめりと。基勝はかん低し。照時が武堅を放さざる刺るまゐ引あげて。やゝ
頭を掻て申さるとも刃は項よりとゞが照時は呪をうち切て即座に死し。
基勝は深痍ゆよりぬ其時はそびめよりまい雑刀を突立て間ちかくまりて
とり時政は次の房より基勝が刺せるを。為体を嗣窺て。やと死そをせざるを
けるかくて緋果とりしは其時は忙く。近習のめの我召裏傍杖い乱心者と見
この処まゞ来る程ゆ腰刀を引抜て。忽地に自殺しゆ。又湯嶋基勝をかは
為体ゆ驚剣抱て禁んとして。深痍を負ひぬ傍杖が後者の老さちゝ居ゆ
ども。この熟武窃に告て主の死態をせよとしさるとく劇騒ぐべらざ
るのまゝを見させよと叮嚀に説示せば。うけゆりぬと一両人外面へ走る
去則件の熟武刀野が後者ゆ告しゆ。其皆呆れ表ふのを固よりまあるべい格家
通家ゆ疑ひと老ちゝ居後者両三人許さるとく奥ゆ入り。主の亡骸と

見る程ゆ其時は正首ゆ彼ゆ我怒ゆ喻せしは後者ゆ一撃ゆ及ばざるゆも
かくゆの稽俊のおん沙汰をとのこと希へば其時ゆのくちなるべい亡骸を竹輿ゆ
乗しく筆へ選りしく。営中へとの熟武ゆ見えあげよるゆ其ゆ我ゆ
熟るゝ〜ゆんやと渝されて願をつたいくぐ執事の旧庇ゆよりまく孺子ゆ家
督をゆうべ歎死の中の事へ仰よ後ひまつらんと。急ぐく主の亡骸を駕て竹
輿ゆ扛乗せく喪皆寺へ入りけるとの一條ゆかつらひて深痍ゆゆ入る湯
嶋を勅るゆなりしゆ時政は叮嚀よとの苦痛を問慰ゆ側に人のなる我我
見ゆく。耳の洞より口と下の世汝へゆ及ばく照時を組伏るゝ我連ゆ刺ゆ殺さで痍を
負ゆ居さる是首をうち落さで。自殺とゆ成ゆ。といへば有驚ゆ憐うゆ。
細女ゆ眼我睜ゆ御掟でゆへども某既ゆ照時ぬゝの頭我掻んとゆうゝと我。
背のさゆ人ありく右の腕を礫と撲ぬ驚ゆくゆ入れば曩ゆうまく作勢ゆ。

営中ゆく自殺させ。當麻太郎武弘へとおもへども煙の如くきえ
うせたるその樣をさる処より。指の跡をもとめ難麻をとく刃を引とて遂にうしなひ
遂に下より刺れとり。痍を負て後に脆の物をもとくふるりしるべを彼人を
刺とあしとの声は杪枯の虫の音よりも細しとも。その夜の霜と消てくけり。
時政は當麻が冤魂基勝に出崇をるよりて式神をもくさいもの。
その式竊に告て。さそいのかの折沒基勝を撰さ式ぐ式ぐ。
可惜をのと式殺とまぐれに器械を食なのがら。いくづふうちまりをしき。
ゆふよりあるこのなのやと問い莞爾とうち笑て。所存なくてやいべ死。
この條の密計は基勝とり預をて渠腹心のあとのくども殺をやとをを
心をるを功を待てく主を侮て寵衰るべ竊に恨て。彼密謀式人を告て死この
折式のく基勝をとの共を殺をとをを。後やをとをなんこの日をを
某は死て深痍を負しとり又基勝が目ゆをえを當麻太郎が冤魂は渠を命
数をとの法を及ひて日来ゆをおりひしるの式幻をんて法のを是則迷ひ怪
をとへとその骨を拾ひ及ひて。洋ゆ答まべ時政は必ずのきも小腰式鼓く感嘆し汝は
智とい量とい親ゆは迫優をまをけをろ宿願は汝が世をかをのをべや成就せん。
努力を秘よと私語ぬ是よりさをを時政は刀野が死骸式かをとをを沐浴して
衣裳を更め營中へ来る得を又彼刀野が家臣ホは照時が一子をる太郎時夏が使者と
ちて營中へ糸上して主の自殺式訴をを。この日右幕下頼朝卿は稲毛三郎重成して
刀野照時を召せをひしが政勢を紛ををく。彼人の遅来式外ロのをねべ安達藤九郎盛
長は鬱憤ををるをををををを。ををををいをを式て引をく来たんと四郎を私を催促をべ式
とをををねべ。公頻を焦燥のをを。その日も西へ渡る比を刀野太郎が所あを勢相時政も
亦糸ををく照時自殺の数式ゆをえあげなをべ幕下は廣元盛長ホを更ホ公文

所より召集く件の祈を定め決め又時政廣元より範頼の送物なる梛の木の首級と彼
朝臣の送書式に成せるひらく幡太の前と安達が使敦俊が横死乃至照時が罪
科一等を宥らるべきなるべし盛長を愛女を娶せく送恨やうこなるべし
故に刃に伏するものなるべ盛長を愛女を娶せく送恨やうこなるべ
又私のさうるのぐう照時が所為なるべ又盛長が
意趣あるべく欲とまるべ御旋に背き罪かろからざと理非正げに
出ヤ世ば廣元要時沈吟ど。右ることといへども分明なるを照時既に死しぬ。
罪科一等を宥らるべきやとけるよりく刀野太郎が使者よその夜
廣通が移りまる兵卒の名を尋ねるまるに集ハ照時が後者ゆく青日戸舟九郎
綱道といへるなるべかるまるが且時夏ホよりこまるまるべ先上貢式ゆるさせて

その使者を選しるひら。幡太の方の首級をば安達藤九郎よりく。夏く
二月式葬らせ又舟九郎が首級をば次の日由比濱よ梟させて幡太の方を
ら。安達が怒を和解ゆ縛みる時政廣元ホが與ゆ移ハ所ゆ盛長ハ遠よ。
ゆ所ゆ制度ゆ感佩しく。ゆ賞ゆ式散しけゆ盛長が。ゆ乃ゆ結なり。
さる程ゆ鎌倉殿ゆ去ぬ。ゆ浮説をかく弘させく。刀野太郎時夏を下野
へぞ流しゆ渠ハ年ぞ十五ゆ満ねど。その親の罪重ゆ式りく。躰て所帯を
没官しく流罪ゆ処らるゆ。少年ゆ遠ゆ田舎ホ由縁ゆ有ゆ
廣元執ゆ一まゆ世ゆ式ゆ式ハしゆ。なるべ。さても件の時夏ハ今年十
三歳なる母親ハゆ春暴ゆ病ゆ式まゆ。この状ハ父自殺しく。
ハホさハ罪祓り毛の列へとく。敦ゆ式ゆ後類奴婢ハ離散しく。ロハ男ゆ
旅の空ゆ式ハ選るゆ式ゆ時政竊ゆ式扶助して外なるから

奥州とて腹心の家隷ゆ各貴賤商しく生ーけまづ旅宿も却豊ゆく。眼入ゆ
似ざりけるを。加以下野なる。足利左馬攻武弟ゆ時政が女婿なるまづ豫く
聞の内意弐受く。件の少年を迎とり。いと懇よ管ねり。この故ゆ時夏へ。
鎌倉よあるゆへよりて。物ゆとりとく。えうらび角ハ流浪人なるゆうゆ方
二町の宅地を構く。奴婢鞭召使へば。そのさゆ郷士よ異ハるゆ。ゆ見のまーく
さゆ傲つとく。日毎ゆ近村を横行し。弓弐放ち。狗を走らせ。山野水涯とと
もなるまーど。荘客ゆ偏らゆ足利殿の客分とく。衆皆避くゆ。せーゆ。
時夏ハちのづくゆ威勢あるさゆちーく。恐ゆぞ挙動ぬ。
附ていの前ゆ出せる肖像のうち。義時ゆ為仲本文ゆハ齟齬ゆ。彼照時と
元勝と相接まるとゆ至りく。うち驚ゆ。好雄のぶさゆ
像ゆあらハせ。ホ見画工の用心ゆべし。閲者難ゆ

朝夷巡島記全傳巻之三 終

早稲田大学図書館
011888007182